

九条だより 「第125号」 より

後藤守彦さん講演「明治150年を考える」（2回目）

4月7日

「戦争の記憶」「植民地支配の記憶」を継承することが大事

後藤守彦さんによる、2年ぶりの『日本の近現代史』連続講演会の2回目が4月7日（土）に開かれました。40名の市民が詰めかけ、後藤さんの話に耳を傾けました。

後藤さんが最初に「4月7日、今日のこの日は太平洋戦争で日本海軍の戦艦「大和」が撃沈された日です」と言ったところ、会場内に緊張が走りました。7万2千トンの巨大戦艦「大和」は、「国体護持」の「一億総特攻の先駆け」との名目と「海上特攻」で沖縄を目指したのです。これは明治以降の無謀な戦争の究極のものだったと指摘しました。

明治新政府が対外的に最初に掲げたのは「脱亜入欧」でした。欧米に従属してアジアを侵略していく、朝鮮、中国への差別、蔑視意識を植え付ける、その土台に徴兵から戦死までのシステム作りがあったと言います。1874（明治7）年の台湾出兵から始まる中国、朝鮮への軍事行動は「70年戦争」です。1894年の日清戦争で遼東半島と台湾の割譲と巨額の賠償金を手に入れ、1904年の日露戦争では関東州の租借権と長春以南の鉄道利権譲渡を経るなど、日本は次々と朝鮮の主権を略奪していきました。同時に誤った軍事思想が皇軍の中にもたらされたと言います。陸軍にあつて、白兵主義、精神主義、海軍にあつて決戦主義、大艦巨砲主義がそれで、以降の日本帝国軍の皇軍思想となって行きます。

遂に1910（明治43）年には「日韓併合条約」の締結を強行し朝鮮を植民地としました。この年、国内では「大逆事件」がでっち上げられ、国内弾圧が始まります。大審院の秘密裁判で1911年1月18日に幸徳秋水ら24名に死刑判決、24日、25日に12名の死刑執行という苛烈なものでした。（後年、幸徳秋水は出身地の高知県中村市議会で2000年「顕彰する決議」が全会一致で採択され、名誉回復が図られました。）明治以降、1918（大正7）年シベリア出兵、1927（昭和2）年山東出兵、1931（昭和6）年「満州事変」、1937（昭和12）年「支那事変」、1941（昭和16）年アジア・太平洋戦争と大日本帝国の崩壊へ至りました。

最後に後藤さんは、1998年当時の小渕恵三首相と金大中大統領との間で交わされた日韓首脳による共同宣言を紹介しました。

「両首脳は、日韓両国が21世紀の確固たる善隣友好協力関係を構築していくためには、両国が過去を直視し相互理解と信頼に基づいた関係を発展させていくことが重要であることにつき意見の一致をみた。小渕総理大臣は、今世紀の日韓両国関係を回顧し、我が国が過去の一時期韓国国民に対し植民地支配のより多大の損害と苦痛を与えたという歴史的事実を謙虚に受け止め、これに対し、痛切な反省と心からのお詫びを述べた。（中略）また両首脳は、両国国民、特に若い世代が歴史への認識を深めることが重要であることについて見解を共有し、そのために多くの関心と努力が払われる必要がある旨強調した。」

＜連続講座＞「明治150年」を考える - 2 -

4月7日（土）団地住民センターにおいて、40名の市民の皆さまの参加で、第68回例会を開催しました。3月に続く、連続講座2回目です。

後藤さんは、「今日、4月7日は、世界一の巨大戦艦と言われた戦艦大和が撃沈された命日です」「乗組員の約92%、約3,000人が大和の沈没によって死亡しました」「戦艦大和の悲劇的な最後は、日本軍隊の無謀な戦術の究極の姿を示しています」と最初に述べて、アジアの視点から見た「明治150年」について語りはじめました。（以下は、HP編集部がまとめた1時間30分の講演のポイントです）

明治時代の思想の中心は、「脱亜入欧」と言われる脱亜思想でした。この思想のもと、欧米に従属しながら日本はアジアに侵略していきました。

明治の時代が採用した、徴兵から戦死までのシステムとして、（1）徴兵制度の創設、（2）軍人勅諭に見られるような皇軍意識の注入、（3）戦死を美化する靖国神社の設置があげられます。

1874年、中国・朝鮮への軍事行動が開始されます。軍事行動は1945年まで続き、70年戦争と言っていいものです。

＜明治時代に起こった日清戦争（第1次朝鮮戦争と言える）、義和団戦争、日露戦争（第2次朝鮮戦争と言える）、それぞれの戦争について、開戦の目的、経過、結果を、後藤さんは詳しく述べました。＞

軍事力を背景として、朝鮮王妃を殺害し、朝鮮植民地化を進めました。朝鮮王妃（閔妃、明成皇后）殺害事件はすべての韓国人が知っていますが、日本人にはほとんど知らされていません。

このような時代にあっても、平和の思想・平和の運動が生まれました。これらの思想・運動は、日本国憲法9条につながっています。

しかし、権力に歯向かうもの、戦争を進めることを邪魔するものは絶対に許さないとして、これらの思想・運動に対し、大逆事件に見られるような死刑を伴う大弾圧が行われました。

明治時代以後、いくつかの戦争を経て、1945年日本の敗戦により、70年続いた戦争は終わりを迎えました。

「明治150年」を考える時、日本310万人・アジア2000万人の犠牲を生んだ事実を絶対に忘れてはなりません。そして、日本国憲法には、無数の犠牲者を生んだ記憶とともに、自由民権運動などの自由と平和を求め続けた闘いの記憶、第一次世界大戦以後に戦争を違法化してきた世界の記憶が結晶化されています。

憲法9条は、日本と世界の共通の財産であり、日本国憲法は、改憲するのではなく実現（完全実施）することこそが歴史に対する責任です。